

2020年度
日本造園学会関西支部大会
研究・事例発表要旨集

Proceedings of the Kansai Branch Meeting of
Japanese Institute of Landscape Architecture

2020年10月24日～25日
大阪大会

主 催

公益社団法人 日本造園学会 関西支部

Kansai Branch of

Japanese Institute of Landscape Architecture

特別史跡特別名勝平城京左京三条二坊宮跡庭園の復原整備工事における植栽管理と地割りについて

○吉川大輔¹、小椋菜美^{1・2}、加藤友規^{1・3}、池田裕英⁴、吉村龍二⁵

1 植彌加藤造園株式会社 2 京都大学大学院地球環境学舎 3 京都芸術大学
4 奈良市教育委員会 5 株式会社環境事業計画研究所

1. はじめに 特別史跡特別名勝平城京左京三条二坊宮跡庭園は、奈良市に所在する奈良時代の庭園（園池）である。昭和 50 年に発掘調査で園池と建物跡などを検出した。発掘後は一度埋め戻されたが、遺構の状態から露出展示可能と判断され、昭和 54～60 年にかけて保存及び園池・建物等の復原整備工事を行い（以後、当初整備とする）、園池については発掘調査で見つかったほぼそのままの状態での露出展示を行った。当初整備から約 30 年経過し、園池・復原建物等全体的に劣化や景石の破損等が見られるようになったため、平成 20 年度から修復整備を始め、平成 26～令和元年度にかけて園池の修復を実施した（以後、今回整備とする）。平成 26～29 年度にかけて園池の景石の保存修復、平成 30 年度は護岸立石・池底石の位置修正、令和元年度には敷地内にトイレの新設、園池の盛土のすき取りと外周植栽の修復剪定及び伐採を実施した。今回はなかでも事業の仕上げとも言える地割りと植栽管理について報告する。

2. 植栽 当初整備時には、発掘調査で池底の堆積粘土層から植物遺体が出土したクロマツ・ウメが景の復原を意図して植栽された。植栽位置は図 1 の通りである。樹根の検出など決め手となる根拠はなかったが、マツについては東院庭園での発掘調査や平安時代以降の日本庭園の手法を参考にして岬状の 3 箇所が植栽位置として選定された。しかし、今回整備の事前調査において周辺植栽の根が景石劣化等の要因の一つであることが判明したため、今回整備でマツは伐採・伐根され、復原はしないこととなった。園池外周植栽は奈良時代の奈良盆地の復原植生に基づいて植栽されていたが、大きく育ちす

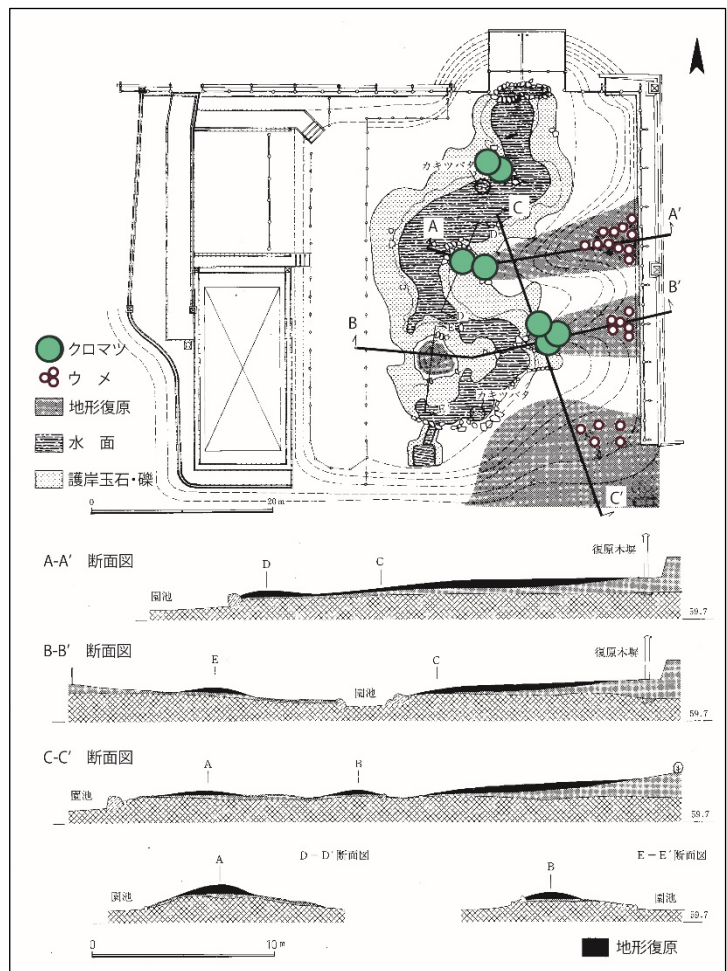


図-1 植栽復原・地形復原位置図

※『特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園復原整備報告書』掲載図面に加筆

ぎたものや樹形が乱れたもの、実生木などで適切ではない樹種も混在する状況になっていた。今回整備では、整備後の再公開に向けて受付から庭園までのルートを変更し、管理用道路とされていた園池東側に位置する高木を含む植栽と外周植栽の間の通路を通ることとしたこともあり、この部分を新たなアプローチにふさわしい植栽帯となることも目指して不適切な樹木の除伐、育ちすぎた樹木の修復剪定などを行った。本庭園の主景は西側の建物を視点場として東方の山並みを借景とするものであった可能性が指摘されており、修復剪定においては復原建物から東方向への眺望を意識した。しかし、現状では庭園東方には高い建造物が建っており、外周樹木を切り下げすぎると東方の山並みよりも手前にある建造物が目立つため、切り下げ高さは遮蔽と眺望の折り合いがつくところで収めた。

3. 地割り 当初整備において、遺構の保護と修景のために覆土が行われた。園池内の覆土対象範囲とおおよその厚みは図1の通りである。園池内の池底石及び護岸立石については部分的に前回整備で補充されたものがあるものの、ほぼ発掘されたままの姿で展示している。しかし、護岸立石よりも外側の断面構造は、遺構面を樹脂で硬化した上に保護層である真砂土を乗せ、その上の化粧面に芝や礫敷といったグラウンドカバーを施した構造になっている。前回整備で覆土したことに加え、芝生の管理で毎年目土を施した結果として、経年の蓄積で厚みが増し、保護層は最大で50cm程になっていることが着工前の調査で判明した。また、園池西側の復元建物内部はこの庭園の重要な視点場であるが、発掘された柱跡から平面的な位置は再現されているが、レベルについては遺構保護のため80cm土を乗せている。つまり奈良時代の目線より80cm高い場所から園池を見ていることになる。これらの点を考慮したうえで、どう見せるべきかという課題があった。往時の姿を誤解が無いように再現しようと考えると園池の盛土は無くすべきだが、遺構の保護を考えると、やはりいくらかの保護層が必要になる。保護層の計画厚の設定としては薄くても5cmは確保することとし、園池の西側には既存の舗装が、周囲には木塀があるので、それらとの取り合い部は現場でおさまりを見ながら合わせていった。

4. まとめ 平城京左京三条二坊宮跡庭園では、国内でも珍しい奈良時代の庭園遺構現物の露出展示を行っている。当初整備では修景のため園池周辺にはマツやウメが植栽され、地形復原として盛土が行われた。しかし、今回整備では植栽樹木が園池そのものや景石の劣化の要因であることが明らかになったため、整備のために伐採したマツは復原しないこととなった。地形復原のための盛土についても、植栽樹木の根が遺構に影響を及ぼすことを防ぐ目的もあったと考えられたため、表土をすき取って当初整備の地形復原による勾配を修正し、外周の盛土に半ば埋没していた景石を露出させるなど、より奈良時代の庭園に近い景色を目指した。当初整備では遺構の保存を最優先したうえで活用を考慮した計画を立案しているが、周辺環境の変化や修復工事後の経年変化を考慮した結果、今回整備では一部前回とは異なる判断に至っている。文化財庭園の修復・活用においては、日々の管理では対応しきれない中長期的な変化への対応が必要となる。本事例は、その一つの例として他庭園の参考になれば幸いである。

5. 引用文献 奈良市教育委員会（1986）：特別史跡 平城京左京三条二坊宮跡庭園復原整備報告書

2020 年度 日本造園学会関西支部 研究・事例発表部会

部会長：川口将武（大阪産業大学）

部会員：阿野晃秀（京都先端科学大学）

浦崎真一（株式会社公園マネジメント研究所）

岡田準人（大阪産業大学）

當内 匡（(株)庭樹園）

永井英樹（環境設計（株））

福井 亘（京都府立大学）

2020 年度 日本造園学会関西支部大会 研究・事例発表要旨集

発行 2020 年 10 月 21 日

編集者 日本造園学会関西支部 研究・事例発表部会

発行者 日本造園学会関西支部事務局

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院農学研究科 環境デザイン学研究室内

E-mail : jila.kansai.jimu@gmail.com
